3/27 2012

Japan Music Education Society News Letter

第47号 No. 47

日本音楽教育学会ニュースレター

目　次

1 会員の窓
1-1 金沢市中学生文化創造夢空間 2
1-2「第 1 回音楽教育の研究方法を学ぶ会」に参加して 2
1-3 東アジアの研究者たちとの交流を体験して 3
1-4 音楽教育支援ポータルサイト活動報告 4
1-5 第 4 回音楽づくりワークショップ活動報告 5
2 新刊紹介
2-1『ソルミゼーションとハンドサインを取り入れた音楽授業
～自分の中にあるものを発見する手だて～』 6
2-2『唱歌・童謡・わらべ唄の伴奏和声–問題の分析と解決のための
補正・改作事例集』 7
3 報告・お知らせ
3-1 平成 23 年度第 4 回常任理事会並びに引継常任理事会報告 8
3-2 日韓ワークショップのご案内 11
3-3 編集委員会報告 11
3-4 会長諮問事項の検討内容について 12
4 事務局より
4-1 お知らせ 14
4-2 来年度の開局時間について 14
編集後記

【日本音楽教育学会事務局】
所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206
TEL＆FAX：042-381-3562　E-mail：onkyoiku@remus.dti.ne.jp
私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26　＊郵便物は私書箱へ
開局時間：月・水・金（9：00～15：00）

1 会員の窓

1-1 金沢市中学生文化創造夢空間

帝京平成大学　降矢　美彌子

金沢市中学生文化創造夢空間（以下夢空間と略す）は，2002 年に第 1 回が行なわれ，昨年（2011 年）で 10 回目を迎えました。

夢空間は，ステージ発表とワークショップ，展示の三部からなる中学生のための 1 年に 1 度の文化の祭典です。2011 年の夢空間のステージ演奏では, 15 中学校の吹奏楽部からなる Dreaming band と 5 合唱部からなる Dreaming Chorus，地域文化発表，スピーチ・コンテスト優勝者の発表，演劇ステー ジ，そして招待演奏　京都フィルハーモニー室内合奏団演奏，京都フィルハーモニー室内合奏団と Dreaming Chorus，福島コダーイ合唱団，MEZAME のジョイント演奏が行われました。

ワークショップでは，スクラッチライトをつくろう，魔法のベアグラスでフラワーアレンジを！おもしろ科学教室，英語で楽しもう！一期一会ー閑静茶会，吹奏楽，絵手紙で心を伝えよう，帯を締めてみよう（着装教室），勾玉作りにチャレンジの 10 ワークショップ。展示コーナーでは，書道部門，美術部門，華道部門の展示が行なわれました。夢空間は，金沢市の中学生のための体験的な文化の一大祭典なのです。

日本では，「学力テスト」や「進学率」が重視され，学校では運動部が重視されて，芸術科目の時間が削減され，子どもたちの文化的な環境が激減しています。合同の演奏を行った吹奏楽部や合唱部は，直前までコンクールで互いに競い合いました。夢空間では，合同練習の中で心を交し合って一つの演奏を創り上げたのです。

「学力」とは，文化的な素地，教養の上にしか育ちません。子どもたちの学力は文化的な教養，体力合わせて初めて子どもを創っていくものでしょう。中学生のための体験的な文化の一大祭典，金沢市中学生文化創造夢空間が 10 年の歳月を重ねたことの意義は大きく，このような文化の祭典が各地に拡がって欲しいと願います。

Dreaming Chorus は，粕谷雪子さんの指揮で，東北復興支援を込めてア･カペラ合唱で「ほたる」と「会津磐梯山」を歌い，京都フィルハーモニー室内合奏団とのジョイントでは，バルトーク・ベーラ作曲『児童と女声のための合唱曲集』から，バルトークが作曲した室内合奏団の伴奏で 「軽騎兵の歌」「行かないで！」「なまけものの歌」「さまよい」「パン焼き」の 5 曲を全曲ハンガリー語暗譜で歌いました。合唱には福島コダーイ合唱団も友情出演し, 地元のアンサンブル MEZAME も加わりました。指揮は降矢美彌子でした。

1-2「第 1 回音楽教育の研究方法を学ぶ会」に参加して

東京芸術大学　大沼　覚子

去る 2011 年 12 月 11 日（日），共立女子大学にて「第 1 回　音楽教育の研究方法を学ぶ会」（以下，「方法論勉強会」）が開催されました。方法論勉強会は，2011 年 8 月に学会主催で行われた神田ゼミナールの後,「リサーチクエスチョンに適した研究方法について学びあいたい」と考えた参加者有志が集まって立ち上げた自主研究会です。

第１回は，まず，「歴史的手法」と「現場研究」の二つの柱を立てて参加者を募りました。当日は，参加者全員で，①音楽教育実践史関係文献のレビューと，②現場研究の方法勉強会の方向性についてのディスカッションが行われました。「第１回」独特の緊張感がありながら，神田ゼミナールで知り合った仲間との再会もあり，楽しいひと時を過ごすことができました。詳細はホームページ http://kandasemi.blogspot.com/ に掲載されておりますので，どうぞご参照ください。

方法論勉強会は，主に，これから音楽教育に関わる研究方法を学びたいと考えている方，学部生，大学院生，若手研究者，現職の先生などを対象とご案内していますが，広く，方法論にご関心のある会員の皆様の参加をお待ちしています。例えば私の場合は，2011 年３月に大学院を修了したところですが，歴史的手法の基本的なスキルを始め，自分が直観的に面白いと思っていてもうまく扱えない史料のこと…など，これから研究を続けていく過程での悩みや内容・技法のブラッシュアップについて，同じく歴史的な手法で音楽教育の諸問題を検討しようと考えている会員の皆様と議論ができたら良いな，と考えています。

第１回の参加者は14名。小さな一歩ではありましたが，今後，地道に勉強を続けながら，息の長い研究会をめざしていきたいと思います。なお，勉強会は２～３か月に１回のペースで行う予定です。このニュースレターが会員の皆様のお手元に届く頃には，すでに第２回（2012年３月25日）が行われていることと思います。第３回も開催予定ですので，皆様のご参加，また研究会に対するご意見などをお待ち申し上げております。

「第３回　音楽教育の研究方法を学ぶ会」開催のお知らせ

○ 日時：５月～６月中の土曜日あるいは日曜日
○ １３：００～１５：００（予定）
参加申し込みは随時受け付けています！！！
詳しくは，ホームページ　http://kandasemi.blogspot.com/　に掲載します。
第１回・第２回の参加者申込者には事務局よりお知らせのメールを送信いたします。
○お問い合わせ
「音楽教育の研究方法を学ぶ会」事務局　onkyoiku.office@gmail.com

1-3 東アジアの研究者たちとの交流を体験して

日本女子大学大学院博士課程後期　古山　律子

2011 年 9 月 24 日～26 日，中国ハルビンで開催された「International Conference for Music Culture Intercommunion of Cross-Border Nation in Northeast Asian Region」に参加する機会を得ました。一面に広がるコウリャン畑を見下ろしながら，初めて降り立った中国東北部のハルビンは，空港周辺をはじめ建設ラッシュでエネルギーに満ち溢れた町といった印象でした。

この国際会議では，中国，ロシア，韓国，日本からの音楽学あるいは音楽教育学研

究者たちが参加し，研究発表及び講演を行いました。日本からは，3 名の先生方の講演と私たち日本女子大学の院生を中心としたメンバーによるワークショップが参加しました。柘植元一先生（東京芸術大学名誉教授）「少数民族の音楽，その国境を越えた音楽，“民族音楽”から“世界音楽”へ」の講演，筒石賢昭先生（東京学芸大学教授）「東アジアにおける伝統音楽教育カリキュラムの開発」の講演と尺八の演奏，日本女子大学の院生らによる「日本の音楽教科書にみられる世界の音楽」のワークショップと坪能由紀子先生（日本女子大学教授）「音楽における“globalization”と“localization”の視点」の講演といった内容です。

柘植先生，筒石先生，坪能先生の講演では，各国の研究者や参加したハルビン師範大学の学生たちより熱い視線が注がれ，日本の研究者の発言に対する彼らの関心の高さがうかがわれました。また，日本のお囃子，フィリピンのトガトン，アフリカのアグバザのパターンを取り上げた私たちのワークショップでは，周囲の反応を気にしているのか消極的な姿勢を示していた学生たちが，徐々に参加し始め自らの演奏を得意気に表す姿を目にしました。文化や教育の違いはあれ，音楽だからこそできる豊かな交流を実感することとなりました。

3 日という短い期間ではありましたが，ここに至るワークショップに向けた計画，準備，協議の過程を通じて，より一層海外へと視野を広げること，自らの研究に対する姿勢などを深く考えることのできる大切な体験となりました。

1-4 音楽教育支援ポータルサイト活動報告

東京芸術大学　村井　沙千子
東京芸術大学大学院　渡邊　拓

「音楽教育支援ポータルサイト」は，2011 年 1 月に発生しました東日本大震災で被災された方々に対し，音楽や音楽教育に関する支援のための情報交流の場を提供する目的で発足いたしました。昨年 6 月の本格始動以降，学会員そしてその関係者の支援要請と提供に関する情報の公開，およびマッチング作業を行っております。ここでこれまでの活動をご報告させていただきます。

【磨いてきれいになりました↑】

〇楽譜支援

学会員の皆様から多くの楽譜，書籍をご提供いただきました。そのうち，要請のあった宮城県内の大学生に，希望された楽譜を届けることができました。

〇楽器支援

・宮城県石巻市の保育所からの要請

津波で大きな被害のあった石巻市の保育所で必要な楽器の提供を求めたところ，支援を申し出てくださった方々から必要な楽器を集めることができました。これらの楽器は必要に応じて運営メンバーが金属磨き，リボンやゴムの付け替えなどの修繕を行い，鈴，カスタネット，マラカス，卓上木琴，トライアングル，タンブリン，手作り布楽器を寄付することができました。

・福島県富岡町の小学校からの要請

福島第一原発の警戒区域内にあり，現在仮校舎に移転している小学校で必要な楽器を，学会員と「楽器 for kids」（有志団体ブラスフェザーズプロジェクト）のご協力を得

て，キーボード１台，木琴２台，鉄琴２台，小太鼓練習台 10 台，小太鼓スティック 10 組，小型タブラ１台，シェーカー1 個，スライドホイッスル１本を提供することができました。

〇演奏支援

宮城県石巻市で２回，フルートとリコーダー，キーボードによるコンサートを行いました。

上記の他にも，本ポータルサイトを知った楽器店より新品のリコーダーを寄付していただくなど，学会内外から支援提供の情報をいただいており，運営メンバー一同非常に心強く感じております。本ポータルサイトを周知してくださった学会員の皆様，情報をお寄せくださった皆様，楽譜や楽器，演奏の支援提供をくださった皆様に心より感謝申し上げます。今後も会員および関連機関・団体で必要としている支援に関する情報，あるいは人的・物的支援の提供に関する情報をお待ちしております。また，学会員の皆様の本企画へのご意見もお寄せください。この企画を通してより多くの方々への支援が実現できるよう，なお一層の努力をしてまいりたいと思います。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

「音楽教育支援ポータルサイト」はこちら ☞ http://onkyoiku-support.blogspot.com/

1-5 第４回音楽づくりワークショップ活動報告

東京学芸大学大学院　木下　和彦

去る 2011 年８月 24，25 日，坪能由紀子先生（日本女子大学）企画･構成による第４回音楽づくりワークショップが日本女子大学目白キャンパスにて開催された。このワークショップは毎年同大学にて開催されているもので，音楽づくりの実践的なアイデアを参加者が持ち寄り皆で体験する貴重な場となっているほか，研究者や楽器演奏者を招聘しての企画もあり，音楽づくりに関心のある人にとっては絶好のイベントである。今年も研究者や現職教員，院生を中心に多彩な顔ぶれが集まった。私も一大学院生として，また今回はささやかながら発表者として参加させていただいた。

本年度の内容を紹介したい。まず初日は，村尾忠廣先生（帝塚山大学）による音階論の講義にて始まり，音階論について研究者や現役の学生が忌憚なき意見を交わしあう場となった。午後はジャンベ奏者の武田ユキヒロさんとともにアフリカンミュージックを楽しむ会が設けられ，武田さんの分かりやすいレクチャーのもと，ゼロからのスタートで奏法を知ることができた。最後は参加者全員で演奏し，皆で大学の教室であることを忘れさせるような本格的なグルーブを体感しながらセッションをすることができた。

二日目は，音楽づくりの実践が中心であった。熊木眞見子先生（淑徳大学）によるトーンチャイムを用いた実践や，現役の院生達による斬新なアイデアが披露されるなど，盛りだくさんの内容であった。私自身も，J-POP の音楽構造に基づいた旋律創作実践をさせていただき，数多くの貴重な意見をいただくことができた。

このワークショップを通してそれぞれが得た感想は，一人で指導書やアイデア集を眺めていて

得られるものではない。実践のアイデアを提供する者，それを受け止めて実践の場や研究に活かそうとする者など，すべての人の想いを包み込むあたたかな空間がそこにはあった。ここから次代の音楽づくりの活動につながる何かが生まれるかもしれないとも感じた。何より，音楽づくりは一人でできる活動ではないのだ。音楽づくりに対するたくさんの想いが共有される機会として，本企画が継続されることを願ってやまない。

2 新刊紹介

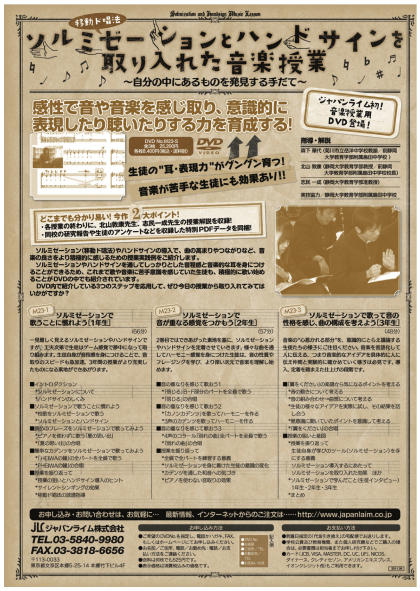
2-1 『ソルミゼーションとハンドサインを取り入れた音楽授業～自分の中にあるものを発見する手だて～』

指導・解説　森下 華代，北山 敦康，志民 一成

■実技協力：静岡大学教育学部附属島田中学校

中学校で実践されたある授業がこの DVD を制作するきっかけとなっています。それは静岡大学教育学部附属島田中学校で行なわれた研究発表会での公開授業なのですが，授業者の森下華代教諭（現菊川市立岳洋中学校教諭）と３年生の生徒たちとともに，私たち参観者も，とても刺激的な時間を共有することができました。

その授業は，「音と音のつながり」や「音の性格」をキーワードに，《翼をください》の「心ひかれる，気になるポイント」をアナリーゼしていくというものでした。各自が楽譜に書き込んだポイントを発表していきますが，ここで想定外のハプニングが起こります。授業のねらい通り，男子生徒が「つけてくださーい」の掛留音の部分をポイントとして挙げたのですが，それに対して，他の生徒から「ドがティに行かないで，レに上がった方が後半の盛り上がりにつながるように思う」といった主旨の発言が飛び出したのです。授業者のねらいとは違う方向ですので，一瞬私の胸に不安が過りました。しかし，この授業の真のクライマックスはここからでした。そこからの子どもたちの議論の面白いこと！根拠の無い独りよがりな主張ではなく，どの発言も音楽の力性や楽曲の構造を的確に捉えているものばかりでした。さらに「ドからレに行く」パターンに変えたものをア・カペラで実際に歌ったり，他の生徒が提案したパターンも試したりもします。試したパターンがやはりおかしいので，提案した生徒が慌てて発言を撤回すると，参観者を含めた 80 人の笑いで，教室全体の雰囲気が一気に和みました。このように，ひょんな脱線から，むしろ一層，この曲の本質に迫る展開へと突き進んで行くというスリル満点の授業展開に，その場に居合わせた私たちは興奮すら覚えました。



このように生徒たちが音楽の深い部分まで捉えることができていたのは，実は，普段からソルミゼーションに親しんでいたからに他なりません。１年生の時から森下教諭の指導のもと，ソルミゼーション（彼らは「ソルミ」という愛称で呼んでいました）とハンドサインに慣れ親しみ，合唱のパートの音を把握する際も，ピアノなどを一切使わずソルミゼーションで練習してきました。そのことにより，ピアノに頼らずとも自分でパートの音を把握することができるようになったばかりでなく，彼らは知らず知らずのうちに，音の持つ「力性」（ティがドに行きたいという方向性など）や，そこから生まれる音楽のニュアンスに対する感受性を培っていったのではないかと，私たちは感じています。そして，そのような音の持つ「力性」や，それらが生み出す音楽のニュアンスを感じ

取っている自分に気づくこと，それがこの DVD のサブタイトルにもある「自分の中にあるものを発見する」ことであり，森下教諭と私たちが追求してきたことでもあります。この授業と，そこに至る３年間の学習の軌跡を再現したのが，この DVD です。

最後に，授業後の生徒の感想をご紹介します。

「半音違うと一回おさえられて，はじける感じがして気持ちいいと思いました。ティ→ドとかファ→ミとかフィ→ソとか気持ちいいのがいろいろあって，人々は気づかずにそういう音を求めていたんだなと思いました」

生徒たちがどのようにソルミゼーションとハンドサインを活用しながら音楽とかかわり，そこで何を感じ，気付き，学んでいったのかが，これだけでも少しご理解いただけるのではないでしょうか。DVD に登場する子どもたちの学ぶ姿は，音楽の授業について考えるたくさんの材料を提供してくれるのではないかと思っています。

M23-1 ソルミゼーションで歌うことに慣れよう［１年生］(66 分)
M23-2 ソルミゼーションで音が重なる感覚をつかもう［２年生］(57 分)
M23-3 ソルミゼーションで歌って音の性格を感じ，曲の構成を考えよう［３年生］(48 分)
各 8,400 円（税込・送料別）

ジャパンライム・ホームページ
http://www.japanlaim.co.jp/fs/jplm/gr923/gd3488
こちらのリンクで DVD の紹介ビデオを見ることができます。
☞ http://youtu.be/9jrRlyc1Ffo

執筆者：志民一成
ジャパンライム株式会社　2011 年 9 月刊行

2-2 『唱歌・童謡・わらべ唄の伴奏和声–問題の分析と解決のための補正・改作事例集』

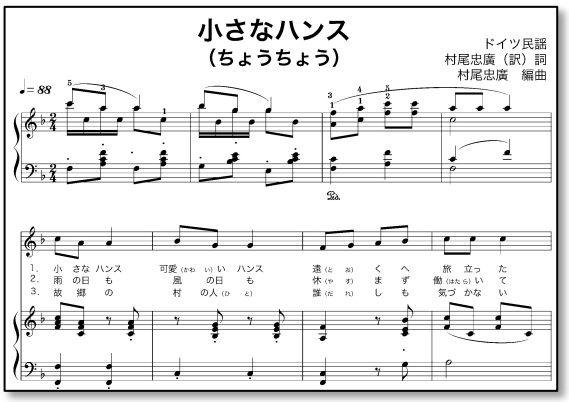
村尾　忠廣著

大学で何十年も音楽科教育法の授業をしていながら，筆者は唱歌に対しても学生に対しても＜誠実＞とは言えなかったような気がする。授業で唱歌などの伴奏をする時には，即興的に適当な和声で弾いていたからである。そのため，たとえば「春の小川」の中間部後半にとてつもなくおかしな伴奏が掲載されていることにも気がつかなかった。授業であっても，自分がモーツァルトを弾こうとする時のような畏敬の念を持ち，「春の小川」や「朧月夜」に向き合いたい。そう思って伴奏の練習を始めると，自分の感性に堪えられない様な伴奏譜が続々と出てきた。教科書の指導書，音楽科教育法のテキスト，数々の唱歌，童謡集・・・これらには明らかに印刷ミスと思われもの，不適切な和声，不誠実な簡易化・・・それらが放置されたまま掲載されているのである。音楽だけでなく，歌詞も気になった。高野辰之作詞とされているのに，かつて文部省が改作，省略した歌詞が掲載されている。歌が洋楽のリズムであるのに，「１音１モーラの平仮名ばかり」という歌詞の入れ込みもおかしい。弱化モーラを活用し，１音多モーラの歌詞として旋律に入れ込み，さらには「漢字仮名交じりの楽譜」をつくってはどうか。そういう問題意識を抱くと，具体的に改善したいと思うようになった。それは「研究」とは言えないかもしれない。しかし，「音楽教育の研究」という時の「研究」とは，事実関係の分析と改善に向けての努力を中心にすえるべきではないか。自戒を込め，本書では次の4点を問題の分析，改善策として提唱した。

(1) 教科書などの伴奏和声についての実態を明らかにし，改作事例を示すこと
(2) 和洋折衷の音楽構造に関して東川旋法理論をもとに説明し直し，それによって和洋折衷の和声と新曲を創って示すこと
(3) 日本語の「弱化モーラ」，「モーラのシラブル統合化」をもとに，強弱リズ

ムの音楽に即した日本語の歌詞をつくること

(4) 明治以来の仮名ばかり楽譜に対し，ルビ法による「漢字仮名交じり楽譜」を新たに提唱，普及を図ること



左の譜例は改作した『小さなハンス（ちょうちょう）』の冒頭である。一人でも多くの音楽教育者，作曲家が本書を手にして実際に音に出してくれることを願っている（全国のヤマハ店，アマゾンなどで購入可）。

執筆者：村尾忠廣
帝塚山大学出版会　2011 年刊行
ISBN：978-4-925247-14-6

3 報告・お知らせ

3-1 平成 23 年度第 4 回常任理事会並びに引継常任理事会報告

日　時：平成 24 年 2 月 19 日（土）14：00～15：30／15：30～17：30

場　所：聖心女子大学　音楽室

出席者：加藤，有本，今川，今田（記録），小川，奥，杉江，坪能／伊野，佐野，寺田，水戸

【報告事項】

1　会務報告

平成 23 年 10 月 22 日以降の会務報告は以下の通りである。二重線以下は，今後の予定。

10 月 22 日・23 日	日本音楽教育学会第 42 回（奈良）大会
10 月 22 日	平成 23 年度総会（奈良教育大学）
12 月 26 日	『音楽教育学』第 41 巻第 2 号，ニュースレター第 46 号，会員名簿発送
平成 24 年　2 月 19 日	平成 23 年度第 4 回常任理事会　引継の常任理事会（聖心女子大学）
3 月 4 日	平成 23 年度第 4 回編集委員会
3 月 27 日	『音楽教育実践ジャーナル』Vol.9-No.2，ニュースレター47 号発送

2　会計報告

(1) 第 42 回大会（奈良大会）会計報告

杉江理事から，収入面では，臨時会員の参加が多数であったこと，広告・ブース出展が順調であったことから，予想を上回る収入があったこと，一方支出面では大会実行委員会企画にかなりの経費をかけたが，収入が多かったおかげで黒字となり，本部に 70 万円寄附することができたことが報告された。

(2) 平成 23 年度会計中間報告

杉江理事から資料に基づいて，12 月末時点での会計の中間報告がなされた。年度会費をまだ払っていない会員からの会費納入が順調に行われれば，ほぼ予算どおりの収入が見込めること，支出もほぼ予算内であることなど，全体として健全会計であることが報告された。

なお学会誌費については，印刷発注先見直しの結果，経費が予算よりも内輪に収まる傾向である。今後は編集過程で必要な経費や企画に伴う非学会員への謝金などへの活用を検討し，学会誌のさらなる充実が図られるよう期待するとの意見が出された。

3　各委員会等報告

●編集委員会

村尾委員長の総括に基づき奥理事から報告された（関連記事を 11～12 頁に掲載）。

●国際交流委員会

引継常任理事会で水戸委員長から報告がなされた（審議事項 3 を参照）。

●広報委員会

小川委員長より，ニュースレターの発行年間スケジュールの確認と 47 号の締切について報告がなされた。

●第２次倫理ワーキンググループ

第２次倫理ワーキンググループ（山本文茂座長）から加藤会長に答申（12 頁参照）が出されたこと，これを受けて次の課題の検討に入ったことが今川事務局長から報告された。

●音楽文献目録委員会

関口委員の報告にもとづき，今川事務局長から報告された。2011 年 12 月 17 日（土）武蔵野音楽大学において第 150 回音楽文献目録委員会が開催された。音楽文献目録第 39 号の登録文献数は 1100，印刷部数は 600 部，印刷費は 918,540 円であった

平成 23 年度　日本音楽教育学会第 42 回大会（奈良大会）収支決算報告書

収入の部

費　目	金　額（円）	備考
学会本部からの準備金	700,000	
広告代・ブース代	284,000	広告11社＝94,000円（0.8万×4）（1万×7） ブース10社＝190,000円（2万×9）（1万×1）
臨時会員参加費　両日	216,000	4,500円×48名
臨時会員参加費　1日のみ	100,000	2,500円×40名
学生会員　1日のみ	4,000	2,000円×2名
学生会員　両日	5,000	2,500円×2名
懇親会費	668,000	4,000円×167名
お弁当代	120,000	600円×200個
会員より寄付（金一封）	10,000	
雑収入	434	
利息	38	8月22日付
通帳作成時の入金	1,000	
収入合計	2,108,472	

支出の部

費　目	金　額（円）	備考
懇親会費	458,820	振込手数料含む
お弁当代	144,000	600円×240個（アルバイト分含む）
チラシ・ポスター 印刷費	51,789	
シンポジウム関係（謝金、交通費、宿泊費込）	220,210	4名（振込手数料含む）
学生アルバイト関係（謝金、交通費込）	390,335	
大会実行委員会関係（交通費、会議費込）	89,926	実行委員会4回、小委員会・打合せ各1回
大会雑費	33,522	
通信費	14,450	
通帳作成時入金の返金	1,000	
本部への正会員事前申込料返金（1名）	4,000	臨時会員用口座への入金間違い
学会本部への返金	700,000	
学会本部への返金手数料	420	
支出合計	2,108,472	

４　事務局から

今川事務局長より，学会と情報ネットワーク教育活用研究協議会（以下 JNK4）間で，会員申込み・管理データベースの開発に関して，「データベースシステムの開発と移植」「システム運用に関する経費」について，以下の合意があったことが報告された。

- システムは JNK4 が管理するサーバ・データベースシステムをカスタマイズして開発する。
- その作業にともなう実費費用は，システム引き渡し後，学会が JNK4 に支払う。
- 会員の Web による申込み（自動返信）及び会員管理システムは，当面 JNK4 が管理するサーバで運用する。
- 入会申込みの確認処理等の実務は学会事務局で対応する。
- JNK4 はサーバのメンテナンス（常時）システム改善に伴う軽微な作業を行う。
- 学会はサーバ運用管理費として月額 5,000 円を支払い（半年ごと）システム運用を JNK4 に委託する。
- JNK4 はシステム改善作業を無償で行い，新しい機能開発についてその都度見積もり作業実費（@3,500 円／時）を学会に請求することができる。

あわせて，名簿作成への御礼があり，ホームページのサーバ変更と今後の事務局体制について報告がなされ，了承された（関連記事を 14 頁に掲載）。

【審議事項】

1　第 43 回大会について

日程：平成 24 年 10 月 7 日（日）・8 日（月／祝）　会場：東京音楽大学（関東地区）

(1) 大会実行委員会から

大会実行委員会からの以下の事項が報告され，了承された。

・大会実行委員会委員長　下道　郁子　　事務局長　福田　裕美

副委員長　本多佐保美　　会計　赤羽　未希
委員　山下薫子　　小原伸一　　長谷川千鶴
　　青山優里子　　水谷早紀　　北村　愛

・大会の方向性について
音楽教育の学究的な面とともに，実践的な面にも焦点を当て，演奏，ワークショップ，できれば公開レッスンも行いたい。

(2) プロジェクト研究
プロジェクト研究１については第２次倫理ワーキンググループによる企画（２年目）であり，「著作権を中心とした学習会」をテーマにすることが提案され，以下の４点について承認された。
・著作権に関して各会員が迷ったり困ったりした具体的な経験や疑問に応える。
・会員の直面する問題についての「アンケート調査」の実施と報告を行う。
・平成 24 年度からの中学校音楽教科書に掲載される「音楽に関する知的財産権」の記載内容も視野に入れ，情報を集める。
・著作権の問題に関して専門家に講演を依頼する。
さらに，プロジェクト研究２についても今田理事から次期担当の寺田理事・伊野理事に引き継ぎが行われた。

(3) 日程，研究発表の割り振り等について
今田理事から次期担当の寺田理事・伊野理事に引き継ぎが行われた。

(4) 研究発表応募要領
第 42 回大会の応募要領に基づき作成され，3 月の『音楽教育実践ジャーナル』発送時に同封される。第 43 回は 10 月 7 日（日）8 日（月）（月曜日祝日）のため，祝日であることを強調することが提案された。また，発表申込書〈様式Ｉ－Ａ〉PC 使用希望に「音声出力の要・不要」を追加記入すること，大学院生の表記の統一が確認された。発表内容は未発表であることを条件とすべきという意見が出たが，「未発表」の範囲と概念規定について様々な意見が出され，これについては口頭発表に関する検討をなんらかの形で開始すべきであることで一致した。

(5) 発表資料保存について
学会事務局での発表資料保存の廃止（実行委員会企画，プロジェクト研究のみ保存）が提案され，これまでの資料の破棄が承認された。資料廃棄についてはニュースレターでアナウンスの上，総会でも告知することとされた。

2　第 44 回全国大会候補地について
加藤会長より，弘前大学での開催（教育学部もしくは教育学部附属国際音楽センターとの共催）について確認されたことが報告され，了承された。

3　日韓ワークショップについて
水戸理事から，昨年末第１回実行委員会が開催され，２月に第２回実行委員会が開催されること，現行の韓国側実行委員会は３月末に解散し，４月からは新しい実行委員会が立ち上がることが報告された。

4　新入会員及び退会会員について
今川事務局長より，提案され承認された（関連記事を 10～11 頁に掲載）。

5　来年度の事務局体制について
来年度の事務局体制について，スタッフの増員と新たな業務について提案され承認された。さらに，開局日と開局時間は検討中であること，また，事務局カレンダーを作成中であり，各委員会や各担当者があらかじめ日程を事務局に連絡し，共有することが確認された（関連記事を 14 頁に掲載）。

＜平成 24 年度第１回常任理事会／第１回理事会の予定＞
５月 13 日（日）13 時～／14 時半～　いずれも立教大学で開催されることになった。

新入会員（平成 23 年 10 月 21 日以降）：16 名

申し出退会者・・・１名

【平成 24 年２月 17 日現在　正会員数：1497 名　学生会員数：２名】

訃　報

平成 23 年 12 月 17 日に，当学会の名誉会員であられた篠原正敏先生がご逝去されました。心から追悼の意を表するとともに，ご冥福をお祈り申し上げます。

3-2 日韓ワークショップのご案内

日韓ワークショップ実行委員会委員長　水戸　博道

来る8月 25（土）26（日）に日韓ワークショップが，明治学院大学白金キャンパスにおいて開催されます。日韓ワークショップは，2008 年（日本女子大）と 2010 年（ソウル）に行われた日韓ゼミナールを引き継ぐ日韓の交流事業です。現在，日韓双方で実行委員会が立ち上がり，ワークショップの内容について検討を重ねているところです。詳細が決まり次第，学会ホームページ等で皆様にご案内する予定です。ふるってのご参加をお待ちいたしております。

3-3 編集委員会報告

編集委員会委員長　村尾　忠廣

今期編集委員会の最後の報告となりますので，以下，2 年間を総括した報告とさせていただきます。

1．今期編集委員会（2010–2011）がおこなってきたこと

(1)「投稿規定」,「編集委員会規定」，その他「投稿の手引き」や各種の「テンプレート」等を全面的に見直し，改正をおこなった。

「投稿規定」と編集委員会で実際に運用されてきたこととの乖離,「投稿規定」自体の中での齟齬,「投稿規定」と「編集委員会規定」との齟齬，表現上の不整合・・・・これらを綿密に検討し，多くの修正をおこなった。

(2)「質を落とすことなく，掲載率を高める」ということを目標に掲げ，鋭意努力を重ねた。その結果，投稿数が増え，掲載率も改善されてきた。枚数制限に苦労したほどである。(一時期の薄っぺらの『音楽教育学』を比べると，格段の違いが見てとれる。)

(3)「読んで面白い」学会誌，ということにも腐心してきた。音楽教育，その研究にも時流がある。その時々に対応したテーマを取り上げ，特集や研究動向を企画してきた。

(4) 一方，こうした一連の努力は，編集委員，査読者に過重な負担を強いることになっている。投稿数が増えてきていることに加え，掲載にこぎつけるまでに，査読者，担当編集委員が細かいチェック，修正要求が繰り返しているからである。そうした修正要求を編集委員会がすべきか否かは，本学会に限らず，多くの学会編集委員会が抱える共通した問題となっている。が，今期の本学会編集委員会は「質の向上」と「掲載率の改善」という 2 点から細かな修正要求をすることを方針とした。この方針は学会誌の改善に貢献したと自負しているが，一方で，編集委員の負担が加重になってきている。編集員の負担をいかに軽減するか，ということも今後は考えてゆかねばならない。残された任期中に対策を議論し，次期編集委員会への申し送り事項とすることにした。

2．『音楽教育実践ジャーナル』,『音楽教育学』の進捗状況

『音楽教育学』42-1 号は，すでに掲載可となっている論文が 1 本あるが，残念ながら新規投稿論文に関しては次号には掲載できないことになった。研究動向は「多文化共生社会にはたす音楽教育の役割」のパート II を企画している。

『音楽教育実践ジャーナル』vol.9-2（通巻 18）はスケジュール通り進み，3 月 23 日に納品予定となっている。「音楽の授業における教科書の役割」という特集であったため，非常に多くの特集投稿があった。

『音楽教育実践ジャーナル』vol.10-1 は，特集テーマを「「評価」再考 ～測ってきた音楽・測ってこなかった音楽～」としている。すでに，昨年の奈良大会の配付資料として特集投稿の募集をおこなっており，また，学会ホームページにも掲載してきた。

『音楽教育実践ジャーナル』vol.10-2 は，「音楽教育におけるアウトリーチ」を特集テーマとすることとし，特集投稿原稿の募集をすることになった。

3．副委員長代理の選出について

副委員長の伊野義博委員から申し出があり，副委員長を辞退することを認めた。辞退の理由は，すでに他学会の編集委員長に就任しているということであった。慣例では，副委員長が次期編集委員長に就任することになっているが，二つの学会の編集委員長を兼ねるこ

とはたしかに難しい。このため，急遽，副委員長代理を選出することにした。次期編集委員会に向けての引き継ぎをスムーズにおこなうためである。審議の結果，尾見敦子委員が副委員長代理に選出された

3-4 会長諮問事項の検討内容について

第２次倫理ワーキンググループ
座長　山本　文茂
委員　今川　恭子・権藤　敦子・西島　央

2011 年 7 月 1 日，日本音楽教育学会会長 加藤富美子より，第２次倫理ワーキンググループ（以下，２次 WG）座長 山本文茂に対して，2011 年２月 18 日付け第 1 次倫理ワーキンググループ（座長 遠山文吉）の「答申」に基づき，以下の５点について検討するよう依頼がありました。

１） 倫理綱領の原案についての検討
２） 倫理委員会の設立等についての検討
３） 第 43 回大会（東京音大）における常任理事会企画プロジェクトの企画･実行
４） 会則上に謳う本学会の目的の見直しと会則改訂の必要性の検討
５） 大会における口頭発表についての検討

これを受けて２次 WG は，３回の会議（2011.7.31，10.22，12.9）と頻繁なメール交換を通して，検討内容を「第２次答申」としてまとめましたので，ご報告申し上げます。なお，答申中にあります綱領原案の取り扱いについては，会長にゆだねられると思われますが，２次 WG の意向としては，原案の提示は理事会における中間報告として留めていただき，第３次倫理 WG または倫理綱領作成委員会において更なる検討を継続することを要望いたします。

第　２　次　答　申

日本音楽教育学会は 1970 年の創設から今日に至るまで，音楽教育研究の振興と発展の歩みを進めてきた。しかしながら，社会の信頼と負託を得て，本学会が今後一層健全な発展を遂げるためには，日本学術会議声明（2006 年）に明言されているように，会員が相互に共有できる倫理プログラムを策定することが重要な課題となってくる。私たちの倫理は，社会が私たちの生み出す成果への理解を示し，対話を求めるための基本的枠組みであるからである。

こうした流れの中で 2010 年に設置された本学会第 1 次倫理 WG（遠山文吉座長）は，学会が取り組むべき倫理的問題をきめ細かく検討し，本学会としては倫理綱領を作成することが望ましいと答申した。これを受けて 2011 年に発足した第２次 WG は，会長諮問の５項目について以下のような検討を行うとともに，新たに設置されることが期待される倫理綱領作成委員会に提案すべく「日本音楽教育学会倫理綱領」原案作成に着手した。以下はその報告である。

諮問事項の検討内容

１）倫理綱領の原案についての検討 ☆ 倫理綱領作成委員会の設置の必要性の検討 ☆ 倫理綱領策定に向けた準備

・ 第 1 次答申（１）の内容をふまえ，「綱領」という概念を採用する。
・ 綱領原案を，総合的な観点から全会員の理解が得られるものとするためには，正式に「倫理綱領作成委員会」を設置することが不可欠である。委員には，会長，外部委員２名程度を構成員に含めることが望ましい。
・ 倫理への関心を高め，広く会員の声を反映するために，６月の学会誌発送時に「アンケート調査」を行い，会員それぞれが直面している問題を寄せてもらう（料金後納返信用紙を使用）。これを第 43 回大会（東京音楽大学）常任理事会企画プロジェクト研究の中に組み入れるようにする。

2）倫理委員会の設立等についての検討
☆ 倫理綱領作成後の倫理委員会常設の必要性の検討
☆ 公的な法律に関わる問題に対応する体制についての検討

・ 倫理綱領策定に向けての準備として，他学会における取り組み（日本保育学会，日本教育社会学会，日本心理学会ほか 14 学会）を検討し「日本音楽教育学会倫理綱領」原案の提案を行う。
・ まずは常設ではなく個別対応とし,「問題が生じたら速やかに倫理委員会を設置する権限を会長がもつ」といったルールを明確にしておくことが必要であるが，倫理委員会の設置に関しては更なる検討が必要である。
・ 顧問弁護士を依頼するといった体制をとることは現状では考えにくいが，常任理事会レヴェルで適任者の検討は必要であろう。

3）第 43 回大会における常任理事会企画プロジェクトの企画･実行

テーマ：著作権を中心とした学習会
内　容

・ 会員が直面している問題についての「アンケート調査」の実施と報告を行う。
・ 著作権に関して各会員が迷ったり困ったりした具体的な経験や疑問に答える。
・ 平成 24 年度からの中学校音楽教科書に掲載される「音楽に関する知的財産権」の記載内容も視野に入れ，情報を集める。
・ 著作権の問題に関して専門家に講演を依頼する。

4）会則上に謳う本学会の目的の見直しと会則改訂の必要性の検討
☆ 倫理的な側面から，会則上に謳う目的の見直しと会則改訂の必要性の検討

・ これは倫理綱領の上位に位置する問題であり，本 WG の検討課題を超えている。
・ しかし，倫理綱領の存立を根拠づける条項を会則に含めることについての検討と，それに伴う会則改訂の必要性は十分に認められるため，新たな「会則検討委員会」の立ち上げを期待する。

5）大会における口頭発表についての検討
☆ 口頭発表の応募段階で倫理的な側面からの審査の必要性の検討
☆ ならびにその方法の検討（誰が審査するか，何をどのように審査するか）

・ 大会口頭発表に関しては，現在の活発な応募状況を鑑み，若手研究者育成という観点から当面はこれまで通り無審査とし，発表に関する「留意事項」の内容を再度検討して注意喚起を継続する。
・ 加えて，新たにチェックリストを作成し，各自の意識を高めることを提案する。リストの提出を義務付けることも考えられるが，企画担当者の負担を増加させる危惧もあり，リストの提出は求めず，発表者がリストにそって各自で確認することで自覚を促す試みとして導入したい。チェックリストは大会要項発送時までに作成して同封する。
・ 他学会では，口頭発表の審査や厳しいチェック体制をとっているところもあるが，本学会の場合は発表がしやすいことも会員にとって魅力となっている。倫理綱領そのものが確定していない現時点では，発表者自身による研究倫理チェックリストの自主的確認という形で，倫理的にも内容的にも発表の質を確保することが当面の課題であり，厳しいチェック体制をとることは時期尚早であろう。

以上

4 事務局より

4-1 お知らせ

(1) 新しい入会申込ならびに会員情報管理システムがスタートしました。
会員情報のより安全で確実な管理をめざして，入会申込および会員情報管理の新システムがスタートしました。システム構築にあたっては NPO 法人「情報ネットワーク教育活用研究協議会」から多大なご助力を賜りました。

重要なお願い

新システムでは，E メールアドレスをご登録戴くことが重要です。まだご登録戴いていない方は，速やかに事務局にご連絡ください。一部の大切なお知らせは今後メールで送信されます（登録の際には「公開の可否」「名簿掲載の可否」を選択できます）。

(2) ホームページが引っ越しました。

国立情報学研究所による学協会情報発信サービス（ホームページのサーバ提供）終了にともない，本学会のホームページを下記の通り移行しました。お手元に学会ホームページを登録されている方は変更をお願いいたします。なお，3 月 31 日までは旧ページからジャンプできます。

☞ 新 URL　　http://www.kayoo.info/JMES-home/

(3) 第 43 回大会に関するお知らせ

第 43 回大会は，10 月 7 日(日)・8 日(月・祝)に東京音楽大学で開催予定です。研究発表をご希望の方は，同封の応募要領をよく読んでお申し込みください。

(4) 会費納入のお知らせ

年度会費の納入をお願いいたします。納入期限は 5 月 31 日です。期限内に会費を納めなければ，その後の送付物，研究発表や論文投稿に支障が出る場合があります。なお，昨年度までの会費未納の方には「払込取扱票」に記載がございます。2 年間会費を滞納すると自然退会となりますのでご注意ください。

4-2 来年度の開局時間について

４月から事務局の開局時間が以下のように変わります。

◎事務局開局時間　月・水・金　9:00～15:00
時間外のご用件は E-mail（onkyoiku@remus.dti.ne.jp）へ
◎事務局員の異動
３月末日まで：亀山さやか・中村幸子・大橋麻理子・長山弘
４月以降：亀山さやか・中村幸子・長山弘

……【編 集 後 記】……

小川容子理事に編集を頼り切りで申し訳ないなぁと思っているうちに，広報委員会や参事制度が整備されて，学会全体がより若い世代にも支えられるようになりました。また，この号の「会員の窓」には国内外での会員の活動が数多く寄せられています。これからもこの小さなニュースレターが会員の交流と，研究の広がりのきっかけとなりますように！！（坪能由紀子）

おかげさまで今回もたくさんの原稿が集まりました。有難うございました。いただいた原稿をすべて掲載するために，ポイントを小さくしたり，行間を狭くしたりして，お花見の満員電車のようになってしまいましたが，どの記事も読み応え十分です。お楽しみください。（小川容子）

……